

未知の重要文書を入手した時である。また、「研究テーマには直接関わらないが、読み物として面白い」文書に出会うこともしばしばある。公文書読解、などと聞くといかにも退屈な作業のような印象を受ける。だが実際は、公文書の内容が非常に詳細であるために、歴史上の個々人の性格までが浮き彫りにされていることがあり、下手な小説よりも面白いことがある。

このように、現在の歴史学では、新たな史料がある現地に直接赴いて史料を獲得し、新たな研究を推進する、という現地主義が広がっている。この現地主義の経験や成果が、大学の授業を通じて学生に伝えられていくのである。

普遍史と西洋中世史…ひとつの入り方

古川 誠之

西洋史への導入として、「都市印章」の

例から始めてみたい。中世の文書史料は羊皮紙に記録され、その下部には丸い物体が吊り下げられている。これが印章と呼ばれる。私はこれらのうち、都市の印章に興味を持っている。この印章は中心部に図像が描かれ、そのまわりを文字がぐるりと囲んでいるデザインである。図像には壁、門、塔といった建築物が描かれており、聖人（教会）が中心に置かれている。これは天国を表象している。この図像表現により、都市の人々は彼ら自身がキリスト教徒のたどり着くべき理想である天上の都市と結びついているという自己表現をしていた。

しかしキリスト教徒でない者にとっては、彼らがなぜそのような表象を用いるのか判然とするわけではない。言い換えるならば、その「ぴんとこない」気持ちこそが、関心をかきたてる原動力となっている。ただし、この「ぴんとこない」という気持ちゆえに、よく他者からなぜこんなものに関心を持っているのかと聞かれることがある。そのような質問に答える場合、私はいつも「なぜ

歴史を追っているのか」という、大きな疑問に答えている自分に気づく。

高校生の私にとって、読み物というものはおもしろくあるべきものだった。その際に事実であるか、ノンフィクションであるかは重要なポイントではなかった。そして歴史の本、特に世界史教科書は、おもしろくない本の代表格だったと記憶している。たとえば高校生の私は、「なぜ教科書は先史の世界から始まるのか」といった、自身が感じた疑問に回答するすべを持たなかった。歴史が物語であるとするならば、世界史教科書という物語はツカミもなく、オチもない。そのため自分自身と関連づけることもできない。それでも生きていけるのなら、人が世界史を、歴史を学ぶことに意味があるといえるだろうか。私は誰であるのか。なぜ今を生きているのか。私はどのような未来へ向かうのか。歴史はこのような疑問に答えてはくれない。学問としての歴史学はまさにそのような私の疑問に答えないものとして近代に生まれたもの、

というのが、現在の私の考えである。そこに「何故歴史の流れが存在するのか」という問いの出る幕はない。このような歴史観は、不確かな時代を生きる私たちにとって、決して十分な満足を与えてくれるものではない。

しかし、歴史は太古の昔からそのようなものとして存在してきたのではなかった。

ここで私が紹介したいのは「普遍史」と呼ばれる歴史のジャンルである。それは前近代のヨーロッパで生まれた歴史観であり、その特徴はキリスト教の神学にもとづいて歴史に意味を与えるものだという点にある。

聖書の冒頭で、キリスト教の神は世界を作り、最初の人間であるアダムとイヴを作る。ここでは歴史は世界の創造から始まる。これに対して歴史の終わりは、ヨハネの福音書で述べられているとおり、人間が神によって救われ、天上の国に迎え入れられることで区切りとなる。前近代のキリスト教に基づいた歴史は「人類の救済をめざして進む、神による人間の教育のプロセス」に

ほかならない。この神による人間教育のプロセスは、天上の国、つまり神の理想に基づく社会と、地上の国、つまり現状の悪を含む社会との対立、抗争のプロセスとしてあらわれる。いつか人間が天上の国にたどりついたときに人間は救済され、歴史は終わる、つまり完成する。

私はキリスト教を信仰していない。したがってキリスト教信仰に基づくこのような歴史観にも、共感をおぼえない。それにもかかわらず、私は初めてこの普遍史という考え方を知ったとき、それがとてもおもしろい、魅力的な考え方だと思った。普遍史という歴史観はツカミがあり、オチがある。

さらに私を面白がらせたのは、それまでに学んできた世界史の教科書のルーツがこの普遍史までさかのぼるという事実である。明治政府は日本ではじめて世界史の教科書を発行した。それが一八七四年に刊行された「萬國史畧」である。この教科書では世界の始まりと人間の誕生についてはアダムとイヴの創造から始められていた。明治時

代にはじめて作られた世界史の教科書は当初、輸入教科書をそのまま翻訳する形でつくられていたという。そのため、日本古来の歴史、神話と矛盾する記述も、そのまま翻訳されていた。現在の教科書も、元をたどれば始まりと終わりのある、完結した物語から生まれたという事実は、私の世界史に対する印象をはっきりと変えた。

つまり私にとって普遍史を知ったのち、世界史とは単なる事実の羅列ではなくなつた。世界史は物語への指向性をもっている。場合によっては、その物語は私自身をまったく納得させないものであるかもしれない。アダムとイヴにはじまり、神の国の到来で終わる普遍史の歴史物語は、キリスト者でない私には全く事実として受け入れられない。それにもかかわらず、普遍史を歴史、つまり事実とみとめてそのような歴史観をもって生きた人々が存在した、その事実は私を引きつける。中世キリスト教世界の人々はどのように自分たちと歴史を結びつけていたのだろう。

中世の人々は、私にとつてはまったくの他者である。なぜ無関係の他者を学ぶのか？と思われるかもしれない。しかし私にとつて、他者を学ぶことは世界を知ることである。私がいまあること、存在することは、世界つまり他者なしにはかなわない。私は他者を知ろうとする行為を通じて世界と結びついていられる。他者を知ろうとする行為こそが私という存在を作る。私は西洋中世史を追うことで、いわば私にとっての歴史と向きあっている。

頭と体で楽しむ考古学

川畑 隼人

考古学と聞くと「古代文明」や「古代ミステリー」などを連想される方が多いのではないだろうか。かく言う私も、海外の遺跡を特集したテレビ番組や、主人公が遺跡を冒険する映画を観て育った人間の一人である。中でも古代エジプト文明に興味があ

り、大学を選ぶ際に迷わず早稲田を第一志望に挙げたのも当然の流れであった。運良く試験に合格して大学生活が始まったのだが、そこで私は初めて学問としての考古学を知った。考古学とは、過去の人類の活動を物質資料に基づいて論理的に説明していく科学であり、それまで私が考古学だと思っていたものは空想やロマンに過ぎなかったのである。

考古学に関する多少の誤解があったものの、本を読むだけでなく遺跡や遺物相手には作業を行う学問は新鮮であった。エジプトへの興味も失っておらず、図書館などでエジプトに関する文献を読む傍ら、派遣のアルバイトや発掘のアルバイトをして資金を貯め、現地に行く準備を整えた。そして学部二年生の二月に、考古学専修の仲間四人で三週間ほどエジプトを旅したのである。長年憧れた地に降り立ち、ピラミッドやツタンカーメンの黄金のマスクを自分の目で見て、ナイル川のほとりで古代エジプトに思いを馳せた。感動を覚えるとともに夢を

実現させたという達成感を得た。

エジプトを満喫して帰国するとすぐに三年生になり、周囲からのプレッシャーも高まる中、そろそろ卒業論文のテーマを考えなくてはならない状況になっていた。自問の日々が続いたが、結果として私はエジプトをテーマに選ばなかった。古代エジプトへの憧れは確かにあったのだが、それは観光地としての興味であり、研究対象ではないのだと実感したのである。

考古学やエジプトへの考え方が変わり、目標を見失ってしまった感もあったが、すでに私はどっぷりと考古学の魅力に浸かっていた。そんな折りに出会ったのが、騎馬遊牧民の考古学である。スキタイや匈奴に代表される古代の騎馬遊牧民は、自らの言葉で歴史を書き残していない。文字記録の少ない／全くない時代における歴史は、考古学に依るところが大きい。他人と違うところが好きな私は、当時周りで誰も興味を持っていなかったこの分野に飛びつき、一人でゼロから勉強し始めた。求めれば師は現れ